ルドルフ・シュタイナーの
『数 論』

ルドルフ・シュタイナーの数論①概要
〔量的な数え方と質的な本質の違い〕
〔数の秘密〕
〔数え方の起源〕
〔主な数の質的意味〕
［宇宙・人間・進化との関連］

ルドルフ・シュタイナーの数論②

『神秘学の記号と象徴』
（GA 101　第1講～第6講）概略

神秘学遊戯団

■ルドルフ・シュタイナーの数論①概要

ルドルフ・シュタイナーの数論（Zahlenlehre / Zahlenmystik）では、
現代数学のような純粋に量的（quantitative）な扱いではなく、
質的（qualitative）・精神的な本質が重視され、
「数」は抽象的な「量」ではなく、
宇宙・人間・進化の秩序を形作る固有の「本質」や
「イメージ形成力」を持つものとされている。

シュタイナーは、数を「秘密のひとつ」として扱い、
古代のピタゴラス的伝統や神秘思想を
霊的科学の観点から再解釈している。

基本的な考え方は以下の通り。

〔量的な数え方と質的な本質の違い〕

物理・感覚的世界では「1、2、3…」と数えることができるが、
精神世界では数え上げること自体に意味がない。
そこではすべてが「統一」に近く、
個々の数は互いに調和的・音楽的な関係を持つ
「本質的な性格」として現れる。

現代の抽象的な算術は、
古代人が数を生き生きとした質として経験していた状態から
遠ざかった結果である。

〔数の秘密〕

「数」は「七つの生命の秘密」のひとつで、
主に旧太陽紀の惑星進化段階を支配し、
この段階で人間は数の中に沈潜し、
「尺度・数・重量」による秩序が生じた。

化学元素の結合や色・音の波数の規則性など、
自然界のリズムにその名残が見られる。

また、集団魂から個々の魂への分化とも結びついている。
（「一から数が生じ、穀粒のように増える」）

〔数え方の起源〕

数え上げの能力はアトランティス時代に原セム人によって発展した。
古代（特に後アトランティス期の初期）では、
数はまだ抽象的な量ではなく、
想像的・質的な像として経験されていた。

（例:「2」は「分裂させるもの」、
「3」は「循環・統一するもの」など）

〔主な数の質的意味〕

シュタイナーは特定の数に固有の役割を与えている。

［1］神の不可分の統一、宇宙の根源的な一性。
［2］「開示・顕現の数」。
　　世界のあらゆる現れは二元性（
　　昼と夜、正と負、善と悪、光と影など）として現れる。
［3］ 二元性の背後にある神性の顕現（2+1）。
　　魂的世界で特に形成的に働く。
［4］宇宙・創造のしるし。
　　地球は第4の実施形態であり、現在の物理的創造を表す。
　　直角や空間的安定とも関連。
［5］「開示の数」のひとつで、人間の創造的個性・自由と結びつく。
　　五芒星（ペンタグラム）として象徴され、悪の可能性も伴う。
［7］時間と発展の数。
　　エーテル世界、時間の流れ、リズムを支配する。
　　惑星進化（土星・太陽・月・地球・木星・金星・バルカン）、
　　文化期、人間の構成など、順次展開するものは7を基盤にする。
　　「完成」の三重の7（7×7×7=343）も重要。
［10］完成・宇宙的秩序の数（1+2+3+4）。
　　古代のオカルト知識で基盤とされた。
［12］空間の数。黄道十二宮、物理世界の形成、空間的秩序に対応。
　　7（時間）と12（空間）の関係は特に強調される。

これらの数は、人間の構成（3・4・5・6・7など）、
宇宙進化、黙示録などの象徴解釈にも適用される。

［宇宙・人間・進化との関連］

世界は「数に従って」形成され、
人間も「数に従って」形作られたとされる（古代神秘の伝承）。
数は「尺度・数・重量」の三位一体の一部として、創造の原理に関わる。
現代科学の抽象化（測定・計算・秤量）は、
内的な質的経験を失った結果であり、
人智学によって再び質的な側面を回復できる。

※上記の内容については、
特にGA 101（数の象徴）、GA 204（尺度・数・重量に関する講演）、
GA 113（7と12の関係）などにおいて論じられている。
なお、GA 101については、
その中に収められている『神秘学の記号と象徴』(GA101　第1講〜第6講)が
「神秘学遊戯団」のサイトに翻訳掲載されている（yucca訳）。

■ルドルフ・シュタイナーの数論②

『神秘学の記号と象徴』（GA 101）概略

ルドルフ・シュタイナーの数論における
主要講義『神秘学の記号と象徴』（GA 101）の
基本的な視点と要点をまとめてみた。

なお、この講義（全8講）のうち、第1講〜第６講を
「神秘学遊戯団」のサイトに翻訳掲載している（yucca訳）。
ここでとりあげるのは、その講義の要点である。
（第７講・第8講については未訳だが、追加で要点を整理）

■ルドルフ・シュタイナー
『神秘学の記号と象徴』（yucca訳より）
(GA101　第1講〜第6講)
※第７講・第8講は追加で整理。

◎第一講　シュトゥットガルト　１９０７年　9月１３日

●基本的な視点

神秘学の記号・形象は恣意的な「意味」の表現ではなく、
事物の本質から取り出された霊的事実そのものを映すものであり、
それを通じて霊界の関係を窺い知ることができる。

●要約

〔五芒星（ペンタグラム）と人間〕

人間の本質は七つの基本要素
（物質体・エーテル体・アストラル体・自我、
および高次の霊我・生命霊・霊人）からなる。

五芒星は、エーテル体を貫く主要な五つの流れの「骨格」を表す。
両手両足を開いた姿勢で、額（眉間）から
右足へ、左手へ、右手へ、左足へ、再び額へと流れる。

これは想像上の図ではなく、エーテル体に実際に存在する動的事実であり、
物質体の建築家であるエーテル体の内的構造を示ており、
瞑想によってこの流れを認識することができる。

〔光と叡智、アストラル体の変成〕

光は叡智（霊的明澄さ）の形象である。
これは比喩ではなく事実に基づいている。

アストラル体は喜び・悲しみ・衝動などの担い手で、
自我がこれを浄化・高貴化すると霊我（マナス）が生じ、
将来は光を放つようになる。

地球全体も、純化された人間のアストラル体の総和により
自ら輝く惑星へと進化する。
（古い太陽の住人であるエロヒム＝光の霊は、
すでに光輝く叡智のアストラル体を持っていた）

叡智が増すほどアストラル体は輝く。
光は叡智の「身体」である。
内的光を獲得する修練として、
暗闇の中で自らの力により光の表象を強め、
アストラル光（物質光ではない叡智に貫かれた光）を生み出す。
これにより高次存在と関係を結ぶことができる。

さらに進むと空間が霊的な音を発し始め、「天球の音楽」を聞き取る。
これはアーカーシャ実質中の音であり、物質音ではない。

〔天球の調和と惑星〕

地球は、土星→太陽→月→地球→
（将来）木星・金星・ヴルカンと進化してきた。

現在の諸惑星は、地球の過去・未来の進化段階に対応する
「並存する年齢層」のようなものであり、名称も本質に根ざしている。

太陽は霊的中心点の周りを螺旋状に動き、
各惑星の速度は調和的比例関係にある。
（例：土星は木星の2½倍、木星は火星の5倍など）

この比例が天球のハーモニー（ピタゴラス的な天球の音楽）を生む。
音が物質を配列する（クラドニの音響図形の類比）ように、
創造的な霊的音が惑星系を組織した。

〔アトランティス人の知覚と人体の比率〕

アトランティス時代は霧に覆われ、人々は外的輪郭ではなく、
魂の状態を色彩像として知覚する霊視を持っていた。
（有益・危険を色で識別）

霧が凝縮して大洪水となり空気が透明になるにつれ、
今日の物理的視力が発達した。
頭部のエーテル体と物質体の一致などもこの時期に進んだ。

人体の比率（高さ・幅・長さがおおよそ3:5:30）は、
ノアの箱舟の寸法（長さ300エレ、幅50エレ、高さ30エレ）と対応し、
アトランティス後の人間の規則的な構成を象徴する。

◎第二講　シュトゥットガルト　１９０７年　９月１４日

●基本的な視点

第一講で触れたノアの箱舟の寸法比（人体の比率に対応）を起点に、
建築物や形式（フォルム）が人間の魂・肉体に及ぼす深い作用と、
惑星進化に根ざした象徴（蛇・魚・蝶・蜂）について。

●要点

〔建築物・形式の魂への作用とゴシック建築〕

外的な形式は、人間の魂に無意識のうちに強力な影響を与える。

中世のゴシック大聖堂は、単なる実用や表層的な「神の家」ではなく、
秘儀参入者たちが特定の意図をもって創り出したものである。

尖塔や高く湾曲したアーチ、支柱群は
「森に踏み入るような」上昇を渇望する気分を呼び起こし、
魂に霊的な力を注ぎ込む。
この力は次の受肉にまで及び、人相や顔貌を形づくっている。

中世のライン地方において、マイスター・エックハルト、タウラーら
ドイツ神秘主義者の深い内面化が生まれたのも、
ゴシック大聖堂の形式が魂を引き出した結果である。

対照的に、現代の唯物主義的環境
（無味乾燥な都市景観やおぞましいポスターなど）は、
意識下で魂を悪い方向へ導く。

秘儀参入者たちは遠い未来まで見据え、
時代ごとに適切な建築様式を流入させて人類の進化の胚を蒔く。

〔アトランティスから後アトランティスへの移行と箱舟〕

アトランティス末期は濃い霧に覆われ、
人々は明確な輪郭ではなく、魂の状態を色彩像として知覚していた。
霧が凝縮して大洪水となり、空気が透明になるにつれ、
新しい物理的知覚と生活様式が必要となった。
この変化は何千年もかけて進行し、人間の肉体も変化した。

肉体を今日の形に作り変えるため、
魂は特定の長さ・幅・深さの形式に囲まれていなければならなかった。
それが聖書に記されたノアの箱舟の寸法である。

古代アトランティス人の多くは水上の舟で生活し、
その内部で新たな空気環境に適した身体を徐々に形成した。
これが箱舟の秘された意味であり、
秘儀参入者たちの長期的な人類育成の働きかけを示している。

〔惑星進化と四大象徴（蛇・魚・蝶・蜂）〕

地球は土星→太陽→月→地球と受肉を経てきた。

神秘学では物質状態を「土（固体）・水（液体）・
空気（気体）・火／熱（より精妙）」と捉え、これらが順次出現した。

・土星：最も濃密な状態は熱／火。人間は熱的な存在。
・太陽：空気が加わり、人間は空気存在（エーテル体が注入）。
　　透過的で軽やか。
・月：水が出現し、軟体動物的な肉体にアストラル体が付与。
　　激情が強かった。月は一時太陽から分離し、再合体した。
・地球：固体が加わる。

もし太陽と月が再合体しなければ、
月単独の最高形態は蛇のようなもの、
太陽単独の最高形態は魚のようなものになっただろう。

これらの象徴は次のように対応する：

・蛇：土・存在。古い月から進化した地球の象徴。
・魚：水・存在。古い太陽の高次霊存在の形態を表し、
　　太陽の力（キリスト）の象徴。
　　魚は物質に深く沈まず利己心が少ない。
・蝶：空気・存在。卵→幼虫→蛹→蝶の変態は、
　　古い太陽での人間の形態変化を保つ象形文字。
・蜂：熱／火・存在。蜂の巣全体は個々の蜂を超えた高次の霊的本性を持ち、
　　古い土星段階の人間のあり方を保つ。
　　巣の温度は人間の血液温に近く、
　　金星段階で人間が高次に再到達する不死的な霊性を象徴する。

これらの形象はすべて、
惑星と人間の進化史に深く根ざした真実から取り出されたものであり、
単なる思弁的な解釈ではない。

◎第三講　シュトゥットガルト　１９０７年　９月１５日

●基本的な視点

神秘学における「数の象徴学」が概説される。
数は単なる抽象や迷信ではなく、宇宙の本質と調和に根ざし、
正しく沈潜（瞑想）すれば世界認識の拠り所となる。
ピュタゴラスの秘教学院でも、
数の性質への洞察が事物の奥深い本質へ導くと教えられた。

●要点

［1］

分割不可能な神性の像「1」は宇宙における神の分離できない一元性を表す。
神そのものの数である。
ただし、単に数字として熟考するだけでは不十分で、
他の数との関係の中でその真義が明らかになる。

［2］

開示（顕現）の数世界に現れ出たものすべてが二元性の状態にある。
光は影や闇なしには開示されず、善は悪の影なしには現れない。
生と死、プラスとマイナス、引力と反発など、
二元性は開示された世界の必然である。
人間が土星・太陽段階の夢幻的意識から地球上で自己意識を獲得し、
死と関係を結ぶようになったのも、この二元性の現れである。

「2」は現象・開示の数であり、神性そのものを表すことはできない。

［3］

神的なものと開示的なものを結びつける数であり、
あらゆる二元性の背後には一元性が隠されている。
したがって「3」は、開示「2」とその背後の神性「1」を合わせた、
自らを開示する神性の数である。

顕現の世界では、「進化」（外への展開）と
「退化・内展」（収縮して種子状態になること）が交替する。
植物の成長と種子への収縮、中
世の神秘的・感情的時代（アウグスティヌスからカルヴァン頃）と
16世紀以降の理知的時代の交替がその例である。

しかし、これだけでは外面にすぎない。
背後には第三のもの――「無からの創造」（新たな創造）がある。
存在と存在の交流から生まれる思考・表象は、
以前にはなかった完全に新しいものであり、

肉体が滅びても働き続け、未来に形を得る。
宇宙のすべては神性の思考から生じた。
三元性は、神的なものと顕現を結びつけるものである。

［4］

宇宙（コスモス）あるいは創造の記号地球は第四の受肉状態にある。
創造において可視的に現れ出たものはすべて「4」の下にある。
人間は現在、鉱物界（第四の領域）で創造者として活動できるが、
植物を自らの思索から形成することはまだできない。
鉱物界の前には三つの元素界があり、
存在が第四の領域に入ってはじめて物質的な目に見えるようになる。
ゆえに「4」は創造の数である。

［5］

悪の数人間は四元性として創造的存在に進化したが、
地球上で第五の要素（霊我／マナス）の萌芽を得て、
自由と独立性を獲得したが、同時に、悪をなす可能性も得た。

「5」が関わるところでは、害や悪の作用が現れる。
病気の経過（発病から5日目、5週目、真夜中から5時間目など）で
医師が最も効果的に介入できるのもこのためである。
人生の七つの時期のうち、第五の時期（おおよそ30歳頃）は
後の人生全体を左右する決定的な転換点となる。

［7］

・完全数

人間が自らの内に持つ萌芽をすべて造り上げたとき、
虹の色や音階など、生のあらゆる領域で
「7」が完全性の数として支配する。
迷信やおまじないではない。

・一元性の分割不可能性（ピュタゴラス的意味）

霊的世界では、1を分割しても残りのものは依然として1に属し続ける。
例えば光が対象で特定の色を反射し、
他の色を吸収する関係を同時に意識することで、再び一を回復する。
これを瞑想的に成就することは魂を高める営みである。

秘密の公式として
$1=(2+x)-(1+x)$
が示される。
分割した部分を常に再び一へと連結するように考える。

・補足

5や7（および関連する数関係）が
病気や人生の出来事の経過に深く作用することを認識し、適
切に対応することが重要である。
数を正しく探求する者は、
この象徴学を通じて生と世界の内奥を理解できるようになる。

◎第四講　シュトゥットガルト　１９０７年　9月１６日

●基本的な視点

類進化の全体像を示す「黙示録の七つの封印」と
薔薇十字のシンボルを中心に、
象徴が人間に及ぼす生気づけ・啓発的作用と、
世俗化された場合の破壊的作用について。

●要点

〔人間＝ミクロコスモス〕

人間は小宇宙であり、
外部の自然に広がるあらゆるものの精髄を内に宿している。
例えば、ライオンが存在しなければ
人間は今日のような心臓を持たなかった。
両者は同じ力から形成されたのである。

パラケルススは「自然の個々の存在は文字であり、
人間はそれらから組み立てられた言葉である」と比喩している。
外なるマクロコスモスと内なるミクロコスモスの対応により、
人間のうちに全宇宙の進化を観照できる。

〔黙示録の七つの封印〕

これらの封印は人類進化の段階を表す。

1）第一の封印

白い衣の人物。両足は溶けた青銅のようで、口から炎の剣が突き出る。
周囲に七惑星の記号。創造的な「言葉」（ロゴス）の象徴。
人間の喉頭は将来、霊化された生殖器官となり、
鉱物的振動を超えて植物的・感受的存在、
ついには自分に似たものを生み出すようになる。
進化の終わりには火の実質の段階に達し、創造的に語る。

始まりの創造力と終わりの人間の創造力が結びつく。

2）第二の封印

人類の四つの原初的集合魂（獅子・鷲・牛・太古の人間に比される）と、
救い主の徴である神秘の子羊。人間は集合魂から個人の魂へ進化してきた。

3）第三の封印

天使のラッパ（天球の音楽）、七つの封印を施された書物、
四頭の馬（人類進化の諸段階）。
霊界からの啓示が人間の進歩に応じて開示される。

4）第四の封印

岩・海・円柱、雲の体にある太陽の顔、虹。
人間が自らの形態を宇宙形態へと拡大し、世界と一体化する段階。
叡智を食物のように内に取り込み体現する。
頭部を太陽の力と合体させる。

5）第五の封印

太陽を生む女。足下の月（有害な力・魔術的影響の克服）。
七つの頭と十本の角を持つ獣（低次の有害な力の克服）。
太陽と地球の再一体化。

6）第六の封印

高次に霊化した人間がミカエルに似て、龍（悪）を束縛する姿。

7）第七の封印

聖杯（グラール）の象徴。
空間は空虚ではなく、存在を結晶化させる源泉（透明な立方体の水のイメージ）。
三つの次元に反次元を加えた六本の線。
低次の衝動（蛇）が浄化されて「宇宙の螺旋」へと上昇。
浄化された喉頭が聖杯の杯となり、鳩（聖霊）が宇宙からの霊的授精を象徴。
虹が全体を包む。
人間と宇宙の一体化の完成を示す。

〔薔薇十字のシンボル〕

E.D.N.（ex deo nascimur）：神から生まれる
I.C.M.（in Christo morimur）：キリストにおいて死ぬ
P.S.S.R.（per spiritum sanctum reviviscimus）：聖霊により復活する

これは原初の誕生、死の克服、霊による復活を表し、
宗教と科学が調和する時代を照らす。

〔封印の作用〕

封印は宇宙の秘密から創られているため、
瞑想を通じて無限の叡智を開き、魂に強力な生気づけと啓発の影響を与える。
霊的な事柄が語られる場に掲げれば、無意識のうちにも最高の作用を及ぼす。
しかし、世俗的な場に置かれて俗っぽい言葉に囲まれると、
肉体組織を損なう破壊的作用（例：消化を害する）を及ぼす。
霊的な記号は霊的な場にのみふさわしい。

◎第五講　ケルン　１９０７年　１２月２６日

●基本的な視点

神秘学的記号・形象は単なる知性的な解釈や思弁ではなく、
感情・心情と結びつけて理解することが求められる。
記号は恣意的ではなく、
アストラル界や霊界（デヴァチャン）の事実と深い関連を持っている。

●要点

〔人間の環境への態度の変容〕

現代人は外界を抽象的・合理的・唯物的に捉える傾向が強い。
神智学・神秘学が真に生きる力となるには、
感覚に現れる世界を、背後にある魂的・霊的なものの
「顔貌・身ぶり・表情」として感じ取るようにならねばならない。
星の運動や大気の変化の中にも、
霊的諸存在の内的経過の外的顕現を見るようになる。

〔動物・植物・鉱物の魂的・霊的なもの〕

・動物

個々の動物は集合自我（群魂）の一部（指のようなもの）。
集合自我はアストラル界にあり、物質界の人間自我に相当する個性を持つ
。集合自我の基本要素は叡智で、
鳥の渡りなど高度な叡智に満ちた行動を導く。
人間自我の基本要素は愛であり、
地球進化を通じて愛を養成することが人類の使命。
動物の集合自我にはこの愛の要素が欠けている。

・植物

集合自我は低位デヴァチャン（ルーパ）にあり、数は限られる。
個々の植物は物質体とエーテル体のみを持ち、
アストラル体と自我は地球のものと一体。
地球はアストラル体を持つ大いなる有機体。
植物は「逆立ちした人間」（根を地球中心へ、人間は頭を宇宙へ向ける）。
花を摘むと地球は快さを感じ（乳を与える牝牛のように）、
根を引き抜くと苦痛を感じる。
収穫時には畑の上に地球の快いアストラル的感情が流れるのが見える。

・鉱物

集合自我は高位デヴァチャン（アルーパ）にある。
物質界には物質体のみが現れ、エーテル体・アストラル体は高次にある。
岩石を砕くと鉱物の自我は喜び・満足を感じ、
結晶化・固体化すると苦痛を感じる。
地球の固体化過程は「苦痛に呻吟する」受難の過程であり、
人類の生存はその苦痛を通じて可能となった（パウロの言葉の根拠）。
将来の霊化によりこの苦痛から解放される。

〔神秘学の修練と記号の本質〕

修練では単に形象を観照するだけでなく、
内的に体験し、感情・感受性を深く養成しなければならない。
神秘学の像は考え出されたものではなく、霊的事実の模像である。

・卍（スワスティカ）：
　アストラル体中のアストラル的感覚器官（蓮華・炎の車輪）の動きの模像。

・五芒星（ペンタグラム）：
　人間のエーテル体を貫く実際の力の流れ
　（左足→頭部→右足→左手→心臓を経て右手→左足）を描くもの。
　幾何学的図形ではなく、エーテル的現実である。

〔神話・伝説〕

伝説や神話は民衆の創作ではなく、
人間がまだある程度の霊視力を持っていた時代の霊視的経験の記録である。
今日でもアストラル界でその出来事を追求できる。
記号や神話の背後にある真実は、思弁ではなく体験によってのみ認識される。

◎第六講　ケルン　１９０７年　１２月２７日

●基本的な視点

集合自我と個の自我の移行、
人間の本質的構成要素の完成度の違い、
エーテル体における象徴的表出、
諸民族の集合魂とその変容（不死鳥）、
そして言葉の象徴学について。

●要点

〔集合自我から個の自我への移行〕

動物はアストラル界に集合自我を持ち、人間は個としての自我を持つ。しかし両者の間には移行状態がある。人間は太古の集合自我から完全な個別的魂へと徐々に移行中であり、今日の大多数は両者の中間にある。地球紀の初めに魂が物質界に降ったとき、人間はまだグループとしての集合自我を有していた。地球紀の完了時に初めて完成された個別的魂を得る。

〔人間の構成要素とその完成度〕

人間は物質体・エーテル体・アストラル体・自我
（感受魂・悟性魂／心情魂・意識魂）からなり、
霊我（マナス）が徐々に入りつつある。

・物質体：
　最も完成された構成要素（土星段階から進化）。
　最小の部分にも巨大な叡智が宿る（例：大腿骨の構造）。
・エーテル体：一段階低く（太陽段階から）、まだ完成途上。
・アストラル体：さらに低く（月段階から）。
・自我：最も若く「赤ん坊」の状態（地球段階から）。

未来の進化：

・木星段階：エーテル体が完成し、愛に貫かれる。
・金星段階：アストラル体が完成。
・ヴルカン段階：自我が完成。

現在の段階：

物質体＝人間段階、エーテル体＝動物段階、
アストラル体＝植物段階、自我＝鉱物段階。

自我は鉱物界の法則のみを理解・支配できる。
将来、生きたものを創造できるようになるには、
道徳的完成（秘蹟主義＝サクラメンタリズム）が必要。
実験台が祭壇となり、
行為が神聖なものとなったとき初めてその知識が伝授される。
個々人の幸せを他者の幸せから分離できなくなったとき、植物意識に到達する。

〔物質体とエーテル体における表出〕

・物質体：
感覚器官（物質原理）、腺（エーテル体）、神経（アストラル体）、血液（自我）。
「血はまったく特性のジュース」であり、血を所有する者が自我を所有する。

・エーテル体：
動物的な形で表出。「人」（物質的部分）、「獅子」（アストラル体／感受魂）、
「雄牛」（悟性魂）、「鷲」（意識魂／霊我）。
これが黙示録の四つの徴であり、実際の霊的事実から取られた象徴。

これらの表出は人種によって優勢度が異なる
（例：骨組織が強い赤色人種、腺組織が強い黒色人種、神経が強いマレー人種、
血液が強いモンゴル人種、マナスを養成しはじめるコーカサス人種）。

〔人間の集合魂（諸民族）とその変容〕

人間の集合魂は空間的に並列するのではなく、時間の中で相次いで生きる。
特定の種族が歴史に登場すると集合魂が「生まれ」、
勢力とともに成長し、消えると変容して別の魂となる。
誕生と死は物質界のみの現象で、高次世界では変容のみ。
平均約500年（大陰暦年75歳×7世代）で燃え尽き、
自らの火から新たに命を吹き込まれる。こ
れが「不死鳥（フェニックス）」の伝説の背景である。

〔言葉の象徴学と修練〕

高次世界は物質界の鏡像として現れ、
しばしば逆転する（数や出来事が逆に読まれる）。

情熱は動物の群れのように押し寄せて見える。
エヴァ（Eva：物質への下降）が
アヴェ・マリア（Ave Maria：霊への上昇）へ逆転するのもこの象徴。
言葉の組み合わせを通じて神秘学的合法則性を意識することは、
それ自体が霊的修練となる。記号や象徴は思弁ではなく、
観ること（Schauen）から生まれた霊的事実の模像である。

◎第七講　ケルン　１９０７年　１２月２８日

●基本的な視点

オカルト的記号・象徴は単なる図解や比喩ではなく、
人間の進化と完成に実在の力として作用するものであり、
思想・感情・表象は人間を形成・変容させる現実的な力である。

●要点

〔思想・感情の形成力と人類進化〕

物質体とエーテル体は、水が氷になるように、
アストラル体の濃縮物である。
太古、人間がアストラル的存在だった時代には、
感情や表象が直接アストラル実質を形づくっていた。
今日でも感情は身体に作用する（恐怖で青ざめる、羞恥で赤面するなど）。
長期的には、思想や感情が数千年かけて人間の形態・人相を内側から形づくる。

ゴシック建築の例：
尖塔や尖頭アーチの形式を観照した人々の魂がエーテル体にまで変容され、
数世紀後にマイスター・エックハルトやタウラーらの神秘主義として現れた。
人類の指導者たちは遠い未来を見通し、
適切な時代に適切な思想形式を植えつけて人間の形態そのものを変えていく。

〔アトランティスから後アトランティスへの移行と象徴の尺度〕

アトランティス末期、エーテル頭部はまだ物理頭部の外に大きく張り出しており、
人間は霧のような霊視力を持っていた。
計算や論理は後の時代の産物である。
死後に感じるエーテル体の拡大感のような表象を当時の人間に喚起することで、
物理体を今日の寸法に形成した。

ノアの箱舟の寸法（幅50エレ、高さ30エレ、長さ300エレ）は、
その思想形式であり、今日の人体の比率そのものである。
同様に、ソロモン神殿の寸法は第六文化期（次の人種）の人体形態を準備する象徴である。

〔高次世界と天球の音楽〕

アストラル界は主に形象の世界、
デヴァチャン（霊界）は音・調和の世界である。
両世界は物理世界と相互に浸透している。

惑星運動の速度比は霊的な音として知覚される。
（例：土星：木星＝2½：1、木星：火星＝5：1、太陽・水星・金星：火星＝2：1、
太陽など：月＝12：1、土星：恒星天＝1200：1）
これがピュタゴラス的「天球の音楽」の実在的背景である。

イニシエートたちは四大元素（地・水・空気・火）の。
霊的背景から聴き取った音程をリラの弦に模した
（低音＝地、ニ＝水、イ＝空気、ト＝火）
ミクロコスモスがマクロコスモスに調和するとき、人間は世界進化と一体となれる。

〔創造の未来への作用〕

今日、美・叡智・真の社会的生活の観点から
物質に刻み込まれた形式（芸術作品、神殿など）は、
地球のエーテル・アストラル体に組み込まれ、
次の木星段階などで自然産物として再生する。

一方、単なる功利性のための機械や工場は、
次の地球受肉で有害な・悪魔的な要素となる。
悪は克服されることで人間の力を鍛え、善へと溶かし変えられるために存在する。

〔カドゥケウス（メルクリウスの杖）の象徴ｖ

人間の意識進化を表す螺旋線：
土星段階の深いトランス意識から、太陽の睡眠意識、月の夢像意識、
地球の昼間意識へと下降し、木星で像意識を、金星で睡眠意識を、
ヴルカンでトランス意識を再び獲得しつつ上昇する。
イニシエートはこの直線的な道を進む。

この図形を瞑想的に観照する
（暗闇から紫・藍・青・緑・黄・橙・赤へ、
さらに鏡像的に戻る色の感覚を通じて道徳的感情へ高める）ことで、
魂が変容し、高次の器官を養成する力が得られる。
外的な光が眼を生み出したように、霊的世界の象徴への没入が霊的知覚器官を生み出す。

◎第八講　ケルン　１９０７年　１２月２９日

●基本的な視点

感覚知覚＝物理世界、
形象・想像＝アストラル世界、
天球の調和・音＝霊界（インスピレーション）。

象徴は単なる思考ではなく、感情と感覚を通じて魂を力づけ、
高次世界への道を開く最も有効な教育手段である。

●要点

〔象徴の形成力と高次世界への上昇〕

高次世界の本質から取り出された象徴・数・形態は、
魂に思想・感情・表象として実際の力を生み、人間を形成する。
ノアの箱舟が現在の肉体を、ソロモン神殿が第六人種の形態を準備するように、
人類の指導者たちは個人の秘教学校と同様の道を人類全体に適用する。

高次世界への上昇に象徴を用いることへの恐れは、

部分的に正当（メディア的状態は過去の意識への後退）だが、
アストラル界を通過せずに霊界へ至ることは不可能である。
真の秘学的修練は、昼間意識を保ったまま
「感覚から自由な思考」を通じて上昇することである。
感覚に満ちた思考（外的知覚に基づくもの）を離れ、
純粋に精神的に構成された表象を得る訓練が必要。
（例：幾何学的円、
　神智学的な古い月の描写＝ほうれん草のような半植物的・半鉱物的実質）
神智学はそのための最良の手段である。

〔アストラル界の二つの領域〕

アストラル界には、物理世界にとって有益な「形態」と
「生命」の対立（上方）と、破壊的な「腐敗」と「病気」の対立（下方）がある。
魂には下位の三体（物質・エーテル・アストラル）が下降させる性質を、
高次の原理（マナス・ブッディ・アートマ）が浄化する性質を映し出す。
キリスト教的表現では、死の際にモーセの律法の板（上方の反映）と
悪魔による罪のリストの朗読（下方の反映）として現れる。

〔想像的形象による教育〕

抽象的概念ではなく、感覚的・超感覚的な形象が真の進化を促す。
（古い月の描写など）

植物と人間の比較：

植物は「逆立ちした人間」（根を地球中心へ、人間は頭を宇宙へ）。
力の方向として十字架を描くと、植物＝下方向、人間＝上方向、動物＝水平。
プラトンの「世界魂は世界体に十字架につけられている」は
この三界を貫く力の方向を示す。

未来の進化：

喉頭は生殖器官（聖杯＝聖なるグラール）となり、言葉が創造的に作用する。
心臓は随意筋へと変容する。

薔薇十字：

黒い木（死滅していくもの）を囲む赤い薔薇。
（欲望に貫かれた物質を再び純潔な植物的実質へ高め、
　赤い血＝自己意識を保持した高次段階）
エーテル体は反復の原理（葉や椎骨の形成）、
アストラル体は終結の原理（花や頭蓋の形成）で働く。

〔数の象徴〕

1：3：7：12 は、
自我：アストラル体：エーテル体：物質体の比率を表す（完成度の度合い）。
土星段階の十二星座が物質体の萌芽を、太陽段階の七惑星がエーテル体を、
月段階の三体分離がアストラル体を、自我の降下が一を与えた。

生成の三要素：

進化（展開）、内展（収縮）、無からの創造。
（外的影響を内的体験に変えて進歩を生む）
3は生命・創造の数、2は開示（二元性）の数、1は一元性の数。

〔鏡の象徴〕

外的世界は霊的本質の鏡像である。
アトランティス末期、直接の霊的知覚が失われ、
反射された霊的光だけを見るようになった。
（楽園喪失、「目が開かれ、裸であることに気づいた」）
これはルシファー的原理による幻想である。
東欧の民話でも、鏡を得るために悪魔の助けを借りる話がこの原理を示す。

■ルドルフ・シュタイナー
　『神秘学の記号と象徴』（yucca訳）
　(GA101　第1講〜第6講)
pdfファイル
https://r5.quicca.com/~steiner/novalisnova/steiner/pdf/zeichen.pdf